

救援の道山あり谷あり

買われる子どもたち

3

か」。スタッフのかけ声で、4〜10歳の15人が一斉に手を伸ばした。

待ちきれないように、子どもたちが皿を取り囲む。視線の先には、焼いた鶏肉ともち米、パイアの漬けもの。「さあ、食べよう」

「アーサー・パッターナー・デック財団」が運営する。「この食事だけで暮らしている子もいる」。夢中



ドロップインセンター。ストリートチルドレンたちが夢中で鶏肉やもち米の昼食を口に運んでいた。タイ・チェンマイ

に食べる15人を見ながらスタッフが話した。ここは、子どもたちがいつでも立ち寄れる場所だ。

タイ・チェンマイ市。表通りから少し入った所にドロップインセンターはある。ストリートチルドレンを支援・保護するNGO「アーサー・パッターナー・デック財団」が運営する。

無料で読み書きを教え、HIVの感染防止プログラムを提供し、傷の手当てをする。シャワーを浴びることもできる。

来た子どもはすべて受け入れる。メーサイのセンターと合わせて約7000人のケアをする。ほとんどの子が親から物乞いや、夜の町での花売りを強制させられている。タイ・ミャンマー国境近郊の山岳民族の出身が多い。親子ともにほとんどがタイの国籍がない。

財団が現在保護している子どもは約1700人。2カ所の「子どもの家」で80人が生活し、残りはタイ各地の学校などで寄宿生活を送



る。財団チェンライ支部長のクル・ナム(42)は「彼らは放っておけば、人身売買される可能性がある」と語る。実際、22人は母親から財団が「買った」。貧しい村には麻薬が浸透し、中毒者の親もいる。保護を申し出る「お金をくれないなら、ほかに売る」と迫ってくる。

ミャンマーに接するメーサイの国境にかかる橋で物乞いをさせられていた12歳の女の子には知的障害があり、やけども負っていた。病院に運ぼうとすると、薬物中毒の母親は「連れて行くなら金を出せ」。妹たちも含め4人分として計4千円(日本円で約1万2千円)を渡したという。

しかし、保護しても逃げ出して家に帰ったり、路上に戻ったりする子もいる。貧困を克服しなければ、問題は解決しない。財団は4年前から新しいプロジェクトを始めた。子どもや若い母親に裁縫や染め物を教え、作品をチェンマイの店で売る。売上げの3割は作り手が受け取り、3割は奨学金や起業の基金に、残りは店の運営に回す。

「子どもの家」に暮らす16歳の少女は元花売り。はがきを作りながら、「もらったお金は少し自分で使って、残りは母に渡す」と笑う。将来はデザイナーになりたい、という。絵を描くことや裁縫をすることは心の安らぎにつながり、物乞いや花売りに代わる「仕事」になる。子どもたちの可能性と未来を信じての支援は、忍耐と寛容の連続だ。敬称略(文と写真 編集委員・大久保真紀)